

東京新橋ロータリークラブ会長賞

「メダカの学校」は学級崩壊!?

御田小学校 大町 幸喜

去年まで、ベランダで父がメダカを飼っていました。たった一年間でどんどん増えて、十匹が三百匹くらいになりました。春になると、毎日毎日たくさんの卵を水草に産むのです。

「メダカはね、とても減っていて、絶滅するかもしれないと、心配されているんだよ。」と父が教えてくれました。

「えー、こんなに増える魚が絶滅なんて。」ちょっと信じられませんでした。

メダカはもともと、田んぼや流れのゆるい小川や水路に生息しています。昔から人間のすぐそばで生きていて、「めだかの学校」という歌があるくらい、人々になじみ深い魚でした。

野生の生き物が減ってしまう理由として、人間による自然破壊がすぐに思いうかびます。メダカが減少したのも、外来魚を持ち込んだり、農薬を大量に使ったりしたためだと考える人もいます。

でも、もう一つ、ちょっと意外な理由があるのです。それは、自然に対する人間の働きかけが減ってきたことです。田園地帯の里山や草原は、たきぎ、肥料としての落ち葉、家畜の飼料、屋根をふく材料などを手に入れる場所でした。しかし、石油や人工的な建築材料、それに化学肥料の登場によって、里山や草原は放置されることになったのです。長い年月、人の手が入ることによってバランスを保ってきた田園地帯は、人間が手を加えないことで、かえって危機を迎えてしまいました。メダカのように、人が適度に手を加えた環境を好む生物が生きられなくなってしまうのです。絶滅危惧種の実にほぼ半分は里地里山に生息し、人々が昔から親しんできたメダカまでも絶滅の危機にあると考えられます。

僕は一学期に、学校の授業で栃木県にある「メダカの学校」に行きました。「メダカの学校」は、メダカ里親の会の人たちによる活動です。メダカのふるさである里山を、元のように利用しようとする取り組みです。会の方々は、化学肥料などを使わずに野菜をつくっています。何年も何十年も前の落ち葉で土から作っている、と教えてもらいました。手入れされなくなってしまった里山を、

元の状態にもどそうとする大切な取り組みだと思いました。

自然を守るとは、手を加えない自然をただ残すことではありません。人が自然界の一員として、他の生き物といっしょに生きられるよう環境を利用することだと思います。野生動物の保護というと、中国のパンダやアフリカのゾウなどに目がむきがちです。しかし、自分の身の周りの生き物についてよく知って、大事にしていきたいと思いました。

「メダカの学校」を学級崩壊から守るために。

講評

メダカの減少の原因について詳しく分析するだけでなく、「メダカの里親会」の人のかわりから感じ、考えた内容が書かれており、主張が明確である。身近な題材をもとにして環境問題について考えている点も評価できる。